◆「都合の悪い歴史」の必要性

今年の夏も「歴史」に関する議論が盛んだった。まだまだ情況は続いていて予断を許さない。確かに私たちの未来にとって重要な岐路の一つになる可能性があるだろう。けれども、それはあくまでも岐路の「一つ」なのであって、歴史とは、人々の数々の選択の積み重ねでできたものであるし、おそらくこれからもそうである。そして世界はTVゲームではない（＝誰かに設計されたものではない）ので、一つの分岐点だけでその後の歴史が決まってしまうことはない。今後、情況がどう変化したとしても、それは私たちの社会のあり方を問い続ける果てしない討論の一こまであることは忘れてはならないと思う。

この連載は、そうした「熱い」議論を横目で見ながら、「歴史を体感する」という、いわば基礎体力づくりを地道に続けている。それは、すでに大会が始まっているのにもかかわらずチームメートに「筋トレが大事！」と説いているようにもみえることだろう。選手たちの達人的な技が次々と繰り出されている会場の裏で、黙々とトレーニングを続けるようなものだ。けれども、敗退するかどんなに勝ち進んでも決勝戦までしかないスポーツの大会と違って、私たちの歴史は人間が生きている限りいつまでも続くものである。変わらず「トレーニングへの誘い」を続けよう。それが役に立つのは「次の大会」かもしれないけれども。

ところで、「歴史から目をそらすな」という言い方も、この夏（相変わらず）よく聞こえた。だが、そういう人がなぜ皆、歴史が「自分の味方」をしてくれると考えるのだろうかと、いつも不思議でならない。その人の立場がどうであれ、「自分の味方」ではない歴史には、「〇〇史観」だとか「修正主義」だとかのレッテルを貼り、偽られたものだと主張している。

むしろ歴史は多様な側面を持っていて、深く知れば知るほど、一つの把握の仕方では捉えきれないような別の面にも気づかされるものである。（その多様な側面を持つ歴史を一つの「物語」とすることで、私たちは歴史を理解可能なものにしているというのは書いてきたとおりである。その作用をよく知り、考察の前提にしていればいいわけであって、歴史から「物語」を取り除けるものではない）　そして「別の面」も知り、歴史に詳しくなれば、自分の立論に「不都合な歴史」も見えてくる。それをどうするのか。例えば、戦争反対と言い、そのために歴史を参照することは必要だが、その一方で、歴史を深く知ることで、過去に戦争が起こってしまった理由のほうも「理解できてしまう」ものだ。そのうえでなお戦争反対と言い続けるためには、（知的な）「体力」が相当に要る。（もちろんそれを鍛えているつもりなのである）

安全保障と徴兵制をめぐる議論に関しても、どうも「体力不足」が目立つ。集団的自衛権への反発を煽るのに、「大日本帝国」下の徴兵制のイメージが利用されているのだ。それが一番恐怖心を煽ることができるからだろう。アジア太平洋戦争に関する「近代史」の知識は深くても、大戦後の「現代史」に疎いという意味では、やはり歴史を知らないといわざるをえない。

これに対し、それはあまりに無知なのではないか、現代においてそのような徴兵制は大規模すぎる、だから徴兵制は軍事的に非合理的だという意見もみられた。アメリカでもヴェトナム戦争の時代に徴兵制は廃止されており、現在でも徴兵制を維持している国は少ない。つまり、少し歴史（軍事史）に詳しい方が徴兵制の現実的な可能性を「詳しく」語れるというのである。けれどもこちらのほうにも問題がある。

結局、徴兵制とは、私たちの国がどのように戦争に関与するかによるのだ。「現代戦は少数精鋭の特殊部隊で･･･」云々というのは、本当に練度の高い部隊にのみ課せられるのであって、そうした「華々しい」役割が国連軍や多国籍軍において日本の自衛隊に回ってくるかどうかは疑問である。そうすると現実的には戦闘そのものではなく治安維持、要所警備や検問というのが役割になってくるだろう。つまり少数の特殊部隊などではなく、ある程度の規模の部隊（少なくとも数千人規模）を派遣する必要がある。もちろんその分、ゼロではないが戦闘で人を殺したり殺されたりする可能性は下がるだろう。このあたり、それぞれはどのような想定で議論しているのだろうか。

戦争へのもう少し深い関与を想定すれば、例として、最大 30 万人規模の派兵がなされたイラク戦争（2003 年）におけるイギリス並みの参加を仮定すれば、戦時には最大 5 万人ぐらいの人員が派兵されることになる。そしてイギリス軍はこの戦争で 179 人の死者を出している（このうち戦闘･敵対行為での死者は 136 人。インターネットにアーカイブされたイギリス国防省の資料から）。

日米の同盟関係が作り上げてきた実績について、今年の春に安倍首相がアメリカ議会で行った演説は、日本が今後はイギリスのような同盟国であることを米国民に期待させるものにみえた。（だから、これは――懸命に抵抗するにしても、想定しておかなければならない未来のひとつである）　ただ今の自衛隊に数万人の隊員を派遣する人的余裕はない。その規模が数千人であっても、各種の研究が示すとおり、戦争はしたくない、戦争に行くことになったら自衛隊を辞めると考えている自衛官も多く、数千人というのは結構ぎりぎりな数だろう。やはりなんらかの「補充」が必要となる。（その場合、「補充」された彼らは国内に配備される。では具体的に誰が、どうやって「補充」されるのだろう？）

徴兵制とは、あくまでも社会の統治をめぐる技術の一つなのであって、むしろ重要なのは、戦争や軍事、安全保障と私たちそれぞれのあり方との係わりをどのように考えるのかという議論のほうである。それを明らかにしないまま議論を進めても、漠然としたイメージに基づくプロパガンダ合戦、断片的で知ったかぶりの歴史知識に基づく「空中戦」が繰り返されるだけだ。現代の戦争に全く無知なままに主張される徴兵制反対論も、歴史的な（ここでは軍事史的な）知識が少々あることで、これに対抗して主張される「徴兵制＝非合理的」論も、歴史を捉えるための「体力」に欠けている。

私たちの社会にとって安全保障を真剣に考える場合、徴兵制でさえ、一つのオプションであることをひとまず認めよう。歴史を学べば、それは民主主義に基づいていることを知ることになる。そして私たちが歴史から学ぶことができるのは、徴兵制そのものが問題だということではなく、「大日本帝国」下、それが自分たちの民主主義のためのものではなく、あくまでも「帝国」を維持するためのものであったということのほうなのである。

「歴史を直視」すれば、日本やドイツなどのファシズムや軍国主義と戦い、民主主義を守るために、どれだけ多くの若者が死んでいったのかが分かるだろう。彼らは「徴兵」されたのである。その負担を平等にするためには、やはり徴兵制しかなかったということだ。ただその「平等」は、人々を「上」に引き上げる平等ではなく、「下」に引き下げる平等であったが、それは戦争という何も産み出さないものに関係する以上、仕方がない。何かを守るために戦う、ということは結局そういうことだ。

少し過激な言い方になってしまうのは承知のうえでだが、徴兵制が人類の歴史に根ざしている意義を「直視」したとき、もう少し強力な徴兵制擁護論が出てきてもよいくらいである。強力な、というのは、ヒトの理性に照らしても、もう少し検討に値する、という意味である。それは平和や安全について、歴史の「体感」に基づいて議論するために是非とも必要なものであろう。

少なくとも、「（俺様の指定する）歴史を直視せよ」などと罵り合うのではなく、それぞれ自分の主張にとって「都合の悪い」歴史を直視することの重要性を認めたい。